

摩多羅神の段

「如来の作願を 尋ねれば 苦惱の有情を 捨てずして
回向を首と したまいて 大悲心をば 成就せり」

釈迦牟尼仏の説きおきたまえるみ教えのそのお心を窺うに、無量寿經に説かれます、阿弥陀如来の救いこそ、出世本懐真實の教えなるぞと、宗祖親鸞聖人は、書き著しておられます。阿弥陀如来の本願は、苦惱の衆生をみそなわし、救わんとこそ立てられた。そのお誓いは末の世までも働いて、我ら衆生の無上の覚り成就して、南無阿弥陀仏の名号に全て収めて施したまう。これまさに「令諸衆生功德成就」―諸々の衆生らをして、功德を成就せしむる―のそのお心でございます。その働きを身に懸けて、明かされたのが親鸞さまでありました。

さてこれは、今は昔の物語、鎌倉の世になった頃。源平のいくさ続いたその後、鴨の長明著した、『方丈記』にも有るように、京の都は 天災飢饉相次いで、げにまこと、末法の世の有りに、「厭離穢土、欣求浄土」のそのままに、浄土を願う人々の、思いはここに極まれり。思いはここに極まれり。

さてそのような折も折、比叡の山の常行堂に一人の僧がおりました。九歳の春に出家して、修行を重ねて二十年。常行堂の堂僧となり、幾度か常行堂に籠っては、念仏行を修せしかど、未だに曾て阿弥陀如来のお姿を、拝することができません。この度こそはと決心し、夏の初めに堂に入り、はや二月も過ぎ行きて、九十日の修行の中で、残された日々も少なくなる頃に、昼過ぎの堂の内なる薮戸の、その隙間より 漏れ来る光揺らめいて、陽炎の揺らぎの中に異形の姿現れる。異形の姿現れる。
(クズレ)

鎧の様は、西域風のこしらえに、弁柄の赤鮮やかに、縁取るは緑青の青際立って、獅噛みの袖も蔽めしく、鬼の顔模った帯留めの色、真金色に照り映えて、その姿、譬えて言えば毘沙門天か閻魔王。肩怒らせて、怒髪は天を突くばかり。すべてを見抜く眼差しで、かの堂僧を見据えると、深く響きのある声で、告げて言うには、

「我こそは摩多羅神。汝が身体貰い受け、喰らわんとこそ罷り来た。汝比叡の堂僧なれば、我が名の由来、既に承知のことと思えど、汝の覚

悟試さんがため、今一度、説き述べようぞ。此れを去る事三百余年、比叡の山の学僧なりし、慈覚大師円仁が、唐の国へと渡りては、念仏の行法習いて、比叡の山に伝えた折に、帰りの船のその中で、空中に声のみ示して、告げたことには、

『我こそは摩多羅神。常行堂の障り神。我祀らざば浄土往生叶うまじ。』さてこのことは、汝もすでに聞いていようぞ。さればまた、堂の本尊阿弥陀如来の後ろなる、小さな厨子に祀られた、我が姿にも馴染みがあるう。」

かの堂僧の答えるに、

「卑しくもこのわたくしも、常行堂で修行する僧であります。比叡の山の言い伝え、集めた文に常行堂の由来述べたる件あり。その中に、摩多羅の神が修行者の身体を喰らうことにより、浄土往生叶うと言えり。さればまた、堂の内、常に経巡るその度に、小さな厨子におわします摩多羅神を伏し拝みつつ、常日頃不思議に思うことのあり。片手に鼓、狩衣の袖翻し舞い踊る、あの姿には如何なる意味があるのでしょうか？」

「いかにもまさにとのことよ。本はと言えば炎の上がる祭壇に、手を差し伸べて、火に火傷せぬ神業を、示すものではあるのだが、我が姿描いた絵師が、火の祭壇を鼓に描いた誤りが、世々に伝わり、尋常ならざる舞い姿、我が本意にはあらねども、日本の国の習いにて、火の祭壇を見知る者さえいなければ、致し方ないことである。さればまた、行者の身体喰らうというも、亡骸を鳥に食わせる波斯の習い。浄土往生願うもの、この世の縁を捨て去って、あの世へ向かう覚悟のうてはかなうまい。さて、汝にはその覚悟、すでに有りやと見受けたが、如何にや如何に。」

摩多羅の神は常行堂の虚空いっぱい広がって、手を広げ、口を開いて、かの堂僧に迫り来る。(クズレ四)

しかしながら、さりながら、かの堂僧は怯むことなく、摩多羅の神に尋ぬるに、

「阿弥陀如来の本願は、苦惱の衆生を憐れんで、漏らすことなく救おうと、誓われたと聞いております。苦惱の衆生が目当てなら、難行苦行のその果てに、身体を捨てる覚悟まで、望まざるはずもなし。摩多羅の神よ、この思い、かねて抱いておりました。御身の答え説き述べたまえ。」

摩多羅の神は詩に託して答えるに、

阿弥陀は光 我は陰
本地権化の 間にて
我が有様は 法蔵と
名乗る菩薩に なる前の
王の姿を 残すもの
王に喩えた その実は
拝火教なる 異教にて
多くの人に 敬われ
畏れられたる 裁き神
欺かれざる ミトラなり

摩多羅の神は さらに続けてのたまうに、
「さればまた、異教の神も仏の教えに帰依すれば成仏するは道理である。世自在王の御許にて、悟り求めて誓い建て、阿弥陀と成った経緯は、汝もすでに承知であろう。とはいうものの、元の性分捨てがたく、常行堂の障り神、行者の覚悟試さんがため、かくのごとくに顕るるなり。」

さりながら、阿弥陀如来の本願は、まことの智慧に基づいた、大慈悲心によるもので、我が智慧の遠く及ばぬところなり、さればまた、あずかり知らぬところなり。

さてこれで汝の間に答え終わった。今はもう思いを残すこともあるまい。この世は末世、穢れた世には見切りを着けて、今こそまさに、汝の身体貰い受けよう！」

摩多羅の神はさらに大きく口を開け、彼の堂僧を一飲みになんと迫り来る。……

さればとて、この期に及び、彼の堂僧の往生際のわるいこと、さらに重ねて摩多羅の神に尋ぬるに、

「浄土に往生することは、かねてより我が願いではありませんが、末世の人々、残したままただ一人往生するは、阿弥陀如来のおこころに、背くこととはなりません。ただ願わくば、摩多羅の神よ、多くの人と共に浄土へ生まれんに、如何なる道があるのかを、説き述べ給え。このことが明らかとなるそれまでは、自らの安楽などもありませぬ。」

まさにその時、摩多羅の神の険しいほどの眼差しはふと消えて、慈悲

を湛えた顔となり、堂内の虚空の中に陽炎の揺らぎ残して、搔き消えた。魔多羅の神は、声のみ残し、告げて言うには、

「汝の思い、承知した。今しばらくはその身体、衆生のために預け置こうぞ。さればまた、衆生済度のその願い、等しく懐く僧一人、今將に思いだしたぞ。汝が此処に来る前に、比叡の山を後にして、人びとのため念仏を教え勧める聖あり。何れは出会う事もあるべし。汝の問いに応えることができるのも、かの聖おいて他にはあるまいぞ。わが言葉、努々疑うこと莫れ。」

かの堂僧は暫し佇み、声の主なる摩多羅の神を求めると、陽炎の揺らぎ変じて一筋の光となって、堂の本尊阿弥陀如来の額なる、その白毫に収まり消えた。

この神変のその後に、かの堂僧は比叡の山を後にして、念仏の教えを尋ね、良き師に出合い、人々の救いのために、生涯かけて、念仏を説き伝えたということである。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も 骨を砕きても謝すべし（今様にて）

語りましたる一段は、比叡の山の堂僧と摩多羅の神の不思議な出会い。琵琶法師、見てきたように嘘を言う、そのようなお叱りあるを承知の上で、若き日の親鸞さまの心の内を描いたものと、ご理解を願う所でございます。

さて、お終いに言わずもがなの事ながら、御聴聞賜りました上からは、拍手喝采は勿論のこと、念仏申して下されば、俄か仕立ての琵琶法師これに過ぎたる果報なし、これに過ぎたる果報なし。

口演録

平成二五年一月十四日・御正忌報恩講・福岡教区三門南組蓮心寺（昼座）